

Hans Gerhard Senger

*Ludus Sapientiae*— *Studien zum Werk und zur Wirkungsgeschichte des Nikolaus von Kues* —

Leiden/ Boston/ Köln 2002, pp. X + 411p.

## 八 卷 和 彦

本書は、ニコラウス・クザーヌスのハイデルベルク学術アカデミー版全集の中の哲学関係著作の校訂・編集作業に永年にわたってケルンのトマス研究所で携わってきたゼンガー氏が、2001年に65歳を迎えた際に、すなわち定年退職するに際して、公刊した大著である。本書は、I. 導入に代えて、II. 著作研究、III. 原典研究、IV. 影響史について、V. 補遺という5部で構成されており、その全体はこれまでに公刊した論文13篇と未発表の論文3篇からなっている。その際に既発表論文にも新たに手を入れて、内容の重複を避けると共に、著者のその後の研究成果をも反映している。

この書物のタイトルである『知恵遊び』とは、クザーヌスの晩年の著書『球遊び』*De ludo globi*と『知恵について』*Idiota de sapientia*を踏まえて名づけられているのであるが、同時にそれは、著者ゼンガー氏の人柄、学問をする姿勢も現わしている。長年にわたる自分の研究の集大成を「知恵遊び」と名づけているのだからである。この姿勢は巻頭の献辞にも示されている。「私をくりかえし極めて多様な方法でこの道に導いてくれた方々、この道で私に伴走してくれた方々、私を励まし有益な批判をしてくれた方々のすべてに。また、自分の知っている私の師たちと自分の承知していない私の師たちのすべてに。また、小びとたちを肩に載せて見せてくれている巨人たち、ならびにその巨人たちの肩の上に載っている小びとたちのすべてに」。この献辞から、著者がいかに謙虚にして開かれた姿勢で学問研究を積み重ねて定年を迎えたかが、如実に読み取れるであろう。

このような著者によって営まれた学問研究が極めて高い水準に到達していることは、新プラトン主義研究の泰斗であり、上記のハイデルベルク学術アカデミーのクザーヌス編集委員会の長を務めているバイアーヴェルテス氏も、トマス研究所で開催された著者の定年祝賀会における異例に長く詳細な祝辞において賞賛し

ているところである (Werner Beierwaltes, *Hans Gerhard Senger, Ein Leben mit Cusanus*, in: *Litterae Cusanae* Bd. 2-2, S. 50-65)。

ここでは大著の諸論文の中から、最初に置かれている「彼の時代におけるニコラウス・クザーヌス」(Nikolaus von Kues in seiner Zeit) という論文と、第 IV 部の最後として収められている『『世界の周縁を旅する人』— 1530 年頃の宇宙研究者?— peregrinatio inventiva についての考察』(“Wanderer am Weltenrand”— ein Raumforscher um 1530? — Überlegungen zu einer peregrinatio inventiva) と題する論文の二篇を紹介して、著者の学問研究の特色を紹介したい。

最初の論文である「彼の時代におけるニコラウス・クザーヌス」で著者は、まずクザーヌスの同時代人によるクザーヌスへの肯定的評価と否定的評価を紹介した上で、そもそも一人の人物を彼の時代の宇宙において描出することは容易な任務ではないとする。その理由は、「彼の時代」とはどれだけの時代的広がりをも想定すべきなのかという問題があるからである。例えばクザーヌスの時代は、ジャンヌ・ダルクの時代、百年戦争の時代、メディチ家の時代、トルコの領土拡大の時代、大シスマの時代、ヨーロッパの諸大学設立の時代等々とも言えるのである。

時代をクザーヌスの生涯にまたがる 1401-1464 年と限定してみても、過去 150 年間のクザーヌス研究が示しているように、彼を「その時代の教会の人」とか「アリストテレスとガリレイの間の天文学者」とか「神秘家にして自然学者」、 「初期ルネサンスのパイオニア」、 「近代の門番」等々、多彩な規定がなされていることをみれば、結局のところ「彼の時代」が細分化(アトム化)されて示されていることになるのである。つまり、一人の人物の生涯の広がりとしての時間を同時代に生じた事実から総体的に表現することはできず、常に部分的にしかそれはできないというわけである。逆に、彼の生涯の間に起きた全てのことが、彼自身の経験した時代であるわけでもなく、「彼の時代」とは、その総体の中から彼が認識したものであり彼が参画したものとして限定されることになる。

つまり、いかなる細部研究も、われわれが「……の時代」と表現したい時代を脱構築するわけではなく、そのような研究による歴史的再構成によってはじめて、その時代が構造化されるのだと指摘した上で、著者は自分が編集作業に携わる中で学んだこととして二点を挙げる。クザーヌスのような人物は自分に先立つ時代

へと立ち戻りながら「自分の時代」を規定し直すことができるという事実とその方法である。クザーヌスは、プラトン、プロクロス、アウグスティヌス、擬ディオニュシウス等々の思想の地平を自由に活用することによって、それらの思想をもって二千年前の時代をも「自分の時代」としていると指摘する。さらに、自分自身の時代には適合しないようにみえる事物でも、それが適合する時代が来るに違いないということも、影響史の研究をすれば学ぶことができるとする。

さらに著者は、「このような、決して目覚しくもなく新しくもないように見える事態を鑑みれば、ニコラウス・クザーヌスの『彼の時代』としては、その生涯における特別な時 *Zeitmoment* について語る事が賢明であるように思われる」とする。そして、空想に満ちた小説のような飾り立てを断念することにより、文書でしっかりと証明された現実の相関関係が示唆されるはずだと記しつつ、「ささやかな、あえて主観的な選択によってただ三つの特別な時点にニコラウス・クザーヌスを立たせる」とする。著者によってここで選択された *Zeitmoment* とは、「チェザリーニ Giuliano Cesarini との出会い」、「1460 年ごろのローマ／1465 年のスビヤコ」、そして「トスカネリ (1397-1482)」である。

ここで著者は、*Moment* という語を「時点」という意味だけではなく、クザーヌスの生涯に決定的な影響を与えたダイナミックな時間的要素という意味で用いている。今はこの「特別な時」の具体的叙述を紹介する紙幅がないが、いずれも著者の豊かな専門的知識と冷静な考察によって、クザーヌスにとっての「特別な時」が説得力のある筆致で示されている。そしてこの論文の最後を、「彼の時代におけるニコラウス・クザーヌス」には、彼が生涯にわたって希求し続けた「消滅しうる時間を越えた」(De doct. ign. III, 12. n. 259) 未来の時も属するに違いない、と締めくくっている点に、著者のクザーヌスに向ける冷静ではあるが温かい眼差しが現われている。

次に、「『世界の周縁を旅する人』—— 1530 年頃の宇宙研究者？—— 「発見のための旅行」についての考察」を紹介してみよう。

この研究で考察の対象とされているのは、「世界の周縁を旅する人」と題されることの多い有名な木版画の成立年代とそれのもつ意味である。この版画は、大地の上に太陽や月、そしてたくさんの星が輝く天球の周縁部（四分円で表示されている）から頭を「外」に出して驚いたように手を挙げている人物が描かれてい

るものであるが、これが世に知られることとなったのは天文学者フラマリオン Nicolas-Camille Flammarion の著書 *L'Atmosphère. Météorologie populaire (Nouvelle édition)* の 1888 年版に収載されて以来のことである（この画像はフラマリオンを紹介している WEB サイトにほとんど必ず掲載されているので、容易に見ることができる）。この版画が様々な機会で紹介されているのは、「1530 年頃の木版画」であって、コペルニクスとほぼ同時代であるばかりか、絵のモチーフが「開かれた無限の宇宙」を示しているように解釈できるという点にある。

著者は、「1. 年代決定の問題」において、この版画の年代付けの諸ケースを吟味することで、クザヌスの展示会のカタログをはじめ、利用者のほとんどが自ら版画の年代設定に取り組むことなく安易に他の年代設定を引用したり、自分の印象から推定した年代を記していることを明らかにする。それに続いて「2. ブルーノ・ヴェーバーによる 1888 年という年代設定の論拠」において、現代ではほぼ通説になっている「フラマリオン自身が 1888 年に自分の本に掲載するために意図的に古めかしく作成したものだ」というヴェーバーの主張を吟味する。この節において著者は、ヴェーバー説のあらゆる論拠を吟味して、明らかに間違えている点、誤りだとは証明できないが正しいとも証明できない点等を列挙した上で、「1888 年にこの版画が成立したというヴェーバーのテーゼは誤りである」とする。しかし同時に著者は、これが 16 世紀に成立したものであるということにも、また作者が誰かということにも、積極的な証拠があるわけではないと、慎重に付言している。「3. この版画の〈真理〉」という節で著者は、モチーフとしても謎に満ちたこの版画について、これまで言われてきたことを吟味しつつ、「天球圏外」に記されている奇妙な車輪や雲と光の様子から、旧約聖書「エゼキエル書」1:4 - 3:15 との関係を示唆する。また、クザヌスよりもむしろジョルダノ・ブルーノの思想や叙述に親近性があることも示唆する。しかし、あくまでも学問的であることを旨とする著者は、以下のように締めくくる。この版画の真理は遙か昔に分かなくなってしまっている。いつの日か誰か他の人が真理を再発見するかもしれない時まで、秘密に満ちて多義的な真理と極めて興味深く多義的なこの芸術作品の特性は、この作品自身に委ねておくしかないと提案したい、と。

以上の二つの章の簡単な紹介からも分かるように、著者の学問的姿勢は禁欲的

であり、保守的とも言えるかもしれない。しかし、最近、欧米で盛んになっているクザーヌス研究の傾向に対して、よい釣り合いをなす研究書となっているだろう。該博な知識と綿密な考察によって成立しているこの書物は、クザーヌスについてのみならず著者ゼンガー氏の学問研究の姿勢を学ぶためにも熟読に値すると確信する。